豪雪！ここばかりは歓迎

第三回 村民スキー教室開催される

ゲームを楽しむ親子

去る、一月三十日（日）上越線五日町スキー場に於て第三回村民スキー教室が開催された。

このスキー教室は、公民館と村体協スキー部門と共催で三年前から開催してきたもの。年々参加者が増え今回は、百数十名の参加があった。当初、大型バス一台の予定が結局大型バス二台、マイクロバス一台までになった。年々、親子連れの参加が多くなっている傾向に主催者側は、「すっかり村民に定着した冬のスポーツになった」と自信をつよくした。

当日は、会場の五日町は小雪のちらつくあいにくの天候となったが、午前中は、初心者指導、午後は雪上レクリエーションと広いゲレンデいっぱいに滑ったり、ころんだりしていた。帰りのバスの中は思い出話しや、歌がとび出し楽しい一日をすごした。

村の読書クラブ「あすなろ」のみなさんは毎月本を読み、みんなで集っては感想を語りあっています。そこで会員のみなさんから感想文をたくさん寄せていただきましたのでこれから何回かにわたって紹介します。

（渡辺淳一作）

「白い宴」を読んで

あすなろ読書会
小杉坂上俊枝

北海道蘭島海岸海水浴場小樽市から十八キロの地点。八月七日忍路側に近いキャンプ地のテントの中にR大学四年生二十才の青年二人、一人の青年江口克彦は沢田研一に「泳がないか」と声をかけた。

「朝飯を食べたばかりだから少し待てよ」と云う返事も待たずテントから出て準備体操を始めた。その時、克彦は軽い眩暈（めまい）を覚えた。「急にやったからだ」一人で呟きながら海に入った。沖から三十米の所で一人の少年が蛙型に足を蹴ったら足先に抵抗を感じた。「人が溺れてる」日赤救護班がかけ付け人工呼吸を行い医師を待った。医師、救護班巡査と人工呼吸を四十分救急車が来、能登病院へ急いだ。

もう少しと云う地点のカーブを切った所で人工呼吸をやっていた人が突然「呼吸をしてるんじゃないですか」といわれて聴診器を当てた。「ドッ、ヅードッヅー」低く不規則だがまさしく心臓の音である。浜では確かに聞えなかった。病院に運ばれて心臓は正常に戻っていた。熱三十七度一分、顔が少し赤らんだ。

両親がかけつけ病室に移された。「酸素吸入は続けろ」指示すると医師は医局へ戻る。五時間後院長の診察、血圧百三十、熱三十七度二分意識なし、夜になって容態悪化、能登病院から札幌大学病院へ移された。

「すぐ気管切開の用意をして」医師の声、医大胸部外科教授重藤庸介教授は手術室の中に居た。挿管して「気道の奥深くチューブで挿入し、麻酔器の酸素バッグをつなぐ、こうしておけば自力呼吸のない時でも呼吸を続けられる。教授は檻の中の獣のように歩き続けていた。結論……。彼の頭の中で多弁心臓病佐野武男生きていても正常人になれない。「心臓移植」移植を行なった病院、医師が頭に甦った　バージニア大学死亡、サンパウロ大学死亡、モントリオール研究所死亡……、全例が失敗であった。両親を納得し、移植手術にふみ切った。提供者R大学四年生江口克彦、佐野武男に移植された。手術は教授と二十人の医師団によって三時間かゝった。

一時容態は悪かったが、三日目頃から恢復に向った。百六十時間経過茶碗一杯のおもゆを飲んだ。翌朝気管にあるチューブを取り替えた時始めて言葉を発した。世界で今迄四十六日生きたのが最高なのです。一旦は危険と見られたが危険状態は脱したと発表された。だが十月二十九日血清肝炎を起し気管支炎、呼吸困難、医師団が全力を尽したが遂に死亡、教授はゆっくり目を閉じた。読み終って、医学の進歩を求め、生命の尊厳を逆にないがしろにしたのではないかという疑問、教授の決意迄の心境等思い、我国最初の心臓移植は医学的事件と同時に社会的事件であったと感じながら終ります。

海外視察記④

オーストラリアにしかいない

羽根のない鳥「エミュー」

藤山田村泰一

自然動物園で「エミュー」と共に

私達は、シドニーより国内線のアンセット航空に乗り継ぎ、約三十分位いで首都キャンベラへ到着致しました。この時点よりガイドさんも二十六歳の若い通称「ショーヤン」に代りニュージーランドとは、また違った感じの研修旅行となりました。

キャンベラでは、湖の近くにある「レイクサイドホテル」に宿泊し、そこは首都にもかかわらず人工都市のせいか自然美があふれ、静かな良い所でした。各々商業区域住宅区域等と分れており、それに緑豊かで、大変住みよい感じがしました。しかし、人口の方は、増えないで停滞気味だそうで、都会というごみごみした様子と人ごみは、全く感じられなく物静かな淋しそうな様子も一面のぞかしていたように記憶しています。

さて、この地での日程は、三泊して、その間に郊外にある有名な近代羊牧場を視察、日本大使館表敬訪問、そして他に政府の造幣局、国会議事堂等を視察しました。そこでこれらについて私の心に残っている事を色々述べていきたいと思います。

私達もこの時点に於いては大部慣れて来て旅のおもしろさも心のゆとりと共に、わずかながら、味わう事が可能になって来ました。まず最初に行った所が、このキャンベラを一望に見渡せる「マウントエンズリー」という山で、バスで登りました。この日は風が強くて困りましたが各人カメラでキャンベラの都市を背景にして撮り合いました。

次に行った所が羊牧場ですが、ここでは十分な時間と共に我々も羽根をのばした様子でした。昔狩りに使ったというブーメランを各人飛ばしたりして楽しみ、又昼食は戸外でのバーベキューランチという形式で食べました。こちらの方では、年間雨量が少く、日曜日等の休日には家族で郊外へでて、しばしばこのようなバーベキューランチを食べるそうです。

私は、最初おばさんがビーフを鉄板の上で焼いていたのを見た時驚きました。というのは、余りにも肉が大きくてそれに、厚いのです。私達は今迄ニュージーランドで食事は、特にディナーは、二時間位い要して食べ、ビーフステーキには、慣れていたのですが、本当に「まいった、まいった」という感じでした。

味付けの方は、やはり日本の味付けの方か食べ慣れているせいかおいしいと思いましたこちらの方では、食事前に飲み物としてワインとか、ビール等を飲むのです。ワインの本場は、一般的には欧州と云われていますが、こちらのワインも安くて豊があり、おいしかったと思います。

バーベキューランチ後は、この牧場で飼っている羊を見学させて頂きました。こちらの方では、人手が足りない為羊を追う時は「シープスドッグ」と云う犬に依って行われています。この犬は、黒くて小さいのですが非常によく訓練されていて、私も感心致しました。これだけの犬ですので値段の方も高いそうです。又、小屋の中で羊の毛を刈る所も見せて頂きました。大変早く刈るので私達も驚いたのですが、この刈る競争もあるという事を聞き、納得しました。刈り取られた毛は三種類に分かれ、各々値段も異るそうです。実際手で触れてみたのですが、当然手ざわりが値段により異りました。毛を刈り取られた羊は、本当に小さくなり、まだ寒い日なのに、なんだかかわいそうな気がしました。その他私達は、馬に乗ったりして、ここでの一時は、非常に楽しい思いでとなって私のアルバムに残っています。

次に我々の行った所は、都心から車で約一時間位いの高原にある自然動物園です。ここには、オーストラリアにしか現存していない「エミュー」という羽根のない鳥、そして有袋類の「カンガルー」、「コアラベア」の貴重な動物を見る事が出来ました。「エミュー」という鳥は、その昔この大陸が陸続きであった為、羽根が退化したという説明でした。この「エミュー」も「カンガルー」も私達がバスに乗って進んで行く途中窓越しからすぐ見る事が可能で、自然の動物園という感じがよくしていました。「コアラベア」これは夜行性の動物で、ユーカリの木の葉を食べて生活しそしてその木の枝にとまっているのです。一般には、探すのは、容易でないのですが、私達は、運よく、高い所に眠っている一匹のこの動物を見つける事が出来すぐカメラに収めた次第です。私達が騒しくした為か眠っている所を起してしまい、その結果少々動いたりしていましたが、その様子は、大変に愛らしく、かわいい動物でした。

この様な限りに於いては私達もリラックスしている事が出来たのですが、その様な事ばかりでもなかったのです。つまり、日本大使館表敬訪問というのがあったのです。

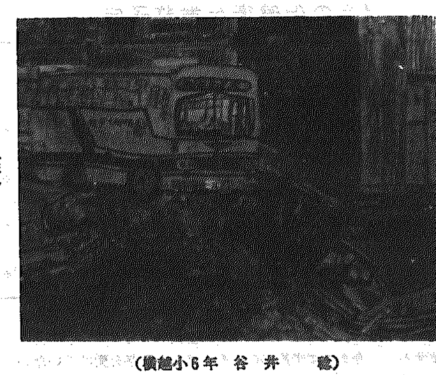
公民館結婚式についてお願い

年々公民館で結婚式を挙げられる方々が多くなってきていることは大変うれしく思っています。しかし、近年、春と秋に集中して、利用者があるため他の公民館業務に支障をきたしているのが現状です。

そこで、五十二年度より第三、第四日曜日は、結婚式以外の公民館業務にあてるため、結婚式は受付けません。また、十二月から二月の間は結婚式は受付けませんのでご協力をお願い致します。

こどもサロン

広報よこごしが発行されると同時に子供サロンをもうけておりました。ここしばらく休みましたが今月号から又続けていきたいと思います。子供達の作品を良く鑑賞して下さい。



（横越小6年　谷井　聡）

〈評〉

十月の校舎写生会のときの作品です。スクールバスを中心に描きました。校章、校名三台がうまい配置にあり、調和のとれた色彩で表わされています。近くには、遊びをくふうした三角馬、竹馬もあります。

このスクールバスに乗って、新しい学校へ通学する作者のうれしさ、楽しさ、といったものが感じとられる絵です。

（横越小教諭　宮田清三郎）

〈評〉

冬休みにかいてきた書初めです。文字の形や大きさ、文字の配列などに心をくばって、力強くかいてあります。また、「とめ」「はね」「はらい」などの基本もしっかりできています。そのために、全体が調和のとれた美しい作品となっています。欲をいえば「人」という字の左右のはらいと名前にもう少し気をくばったら、なおよかったと思います。

（横越小教諭　小林　蓉子）

（横越小六年　佐藤　満弘）